

序

真か偽か、正か誤か、何れを選ぶかと問われれば、大方は真を採り、誤を忌避する。人は真を尊び、誤りは正すことを以て善とし、嘘をつくことは悪く、不正は為すべきではないというのが常識とされるからである。したがって他人から身に覚えのない間違いを指摘されると、人は怒りを感じ自らの正しさを主張して潔白を証明しようと努力することになる。この場合、人を説得する迫力を持ち得るのは真実だけである。ところが一方、同じ正しさを主張されても納得の行かない場合がある。これは正直者が馬鹿をみるといった類のことではなく、話の筋道は通っているけれども何か合点が行かず、正しくさえあればよいというものでもなかろうと感ずる場合である。

この二つの場合は、一見矛盾しているようであるが、実は共に正しさを問題にしなが、その意味は異なるのである。そしてこの二つの正しさは同じ場の中で使われて屢々混乱を招く。たとえば技術的検討のための意見交換の場が、何時の間にか人身攻撃の場になったりするのである。

これは議論が白熱したためというより、論理の問題と倫理の問題が混同されたところに端を発していることが多い。つまり論理の正しさと倫理の正しさは全く意味が違うのである。論理における真偽とは約束であり、ある前提の下で成立する結果を真と言ひ、成立しない結果を偽と言ひ。数学で二つの負数を掛け合わせたものを正数とするのは論理の約束であり、これを負数とすれば偽ではあるが、別に倫理的に悪いわけではない。他人をだます偽言とは凡そ異質なものである。

論理の真偽、正誤はある約束の範囲内の問題で、論議の対象となるのはその前提であり展開である。偽を贖とし、誤りを嘘とすることによって本来の討議はその場を失うことになる。

研究とは、ある意味では論理の追求であり、その構築と展開が一つの提案である。しかし論理はあくまでも、ある前提の下に成立することを弁えるならば、その前提に当って研究者に求められるものは、確かな論理性と共に厳しい倫理性ではあるまいか。

昭和60年4月

清水建設株式会社技術研究所長

工学博士 太田利彦